

聖書：ヨハネの福音書 11：28～37

説教題：イエスは涙を流された

日時：2022年4月17日（朝拝）

昨年の一足先礼拝では今日の箇所の前部分、11章17～27節から説教させていただきました。このヨハネの福音書11章はマルタとマリアの兄弟ラザロの生き返りを記した章です。イエス様はラザロが病気で聞いてもすぐに出発なさらず、なおその時いた場所に2日とどまられたと6節に記されています。その後、出発してマルタとマリアのところに来られた時にはラザロの死後すでに4日が経過していました。なぜイエス様はラザロの病気についてのニュースを聞いても、すぐ出発されなかったのかと私たちが思います。5節に「イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」とあります。なのに、そこに2日とどまられました。それは神の栄光のためであると4節に書かれています。そして14～15節を見ると、イエス様は出発する際、「あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいますが。」と言われていました。イエス様はこうしてあえてラザロが死んでから彼のところに到着するようになされたわけです。

イエス様が来られて先に気が付いたのは姉のマルタでした。そのマルタとイエス様のやり取りについて昨年見ました。その中心的な言葉は先ほどの子どもにも分かりやすいお話で参照した25節の言葉です。25節と26節：「イエスは彼女に言われた。『わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。』」それに続く今日の箇所では、今度は妹のマリアがイエス様のところへ行きます。マルタはマリアにそっと「先生がお見えになり、あなたを呼んでおられます」と伝えます。なるべく人々が少ないところで彼女がイエス様と個人的にお話できるためでしょう。しかしマリアを慰めていたユダヤ人たちはマリアが立ち上がると一緒について行きます。そのためイエス様と彼女とのやり取りは、その人々が見ている前でなされることとなります。

マリアはイエス様のところに来ると、足もとにひれ伏して言いました。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」これは21節のマルタの言葉と同じです。原文で一か所、語順が入れ替わっていますが、使われてい

る言葉は全く同じです。このことはマルタとマリアはラザロの死後、この言葉をずっと互いに語り合っていたことを示しているように思われます。ラザロの病気を治していただきたく、イエス様をお呼びしたが間に合わなかった。イエス様がもしここにいてくださったら私たちの兄弟は死ななかつたでしょうに。そのように言い続けていたので、イエス様とお会いした時、まずその言葉が姉の口からも妹の口からも出て来たということだったのではないかと思います。

さてマルタとマリアについて、ここからあまり多くのことを言い過ぎることに注意しなければならないと思いますが、一応書かれていることに注目して分かることは、マリアの場合、イエス様の足もとにひれ伏してこの言葉を言ったということです。マルタと比べて一層、感情の強さが現れています。さらに彼女はこの言葉を言いながら、泣いていました。この「泣く」と訳された言葉は強い言葉で、声を上げて嘆く様を表す言葉です。彼女について来て、一緒にそばにいたユダヤ人も同じでした。こんな状況で今日の箇所が中心的に描いていることは何でしょうか。それはこの状況のただ中におられたイエス様のお姿です。特に二つの姿に今朝、注目したいと思います。

一つ目は 33 節の「霊に憤りを覚え、心を騒がせて」というお姿です。最初の「憤りを覚え」という言葉は、もともとは馬が鼻を鳴らす様子を表す言葉です。つまり鼻息が荒い。それを人間に当てはめれば「憤る」とか「憤慨する」とか「怒る」といった意味になります。もう一つの「心を騒がせて」という言葉は第三版までは「心の動揺を感じて」と訳されていました。同じ言葉はこの後、ヨハネの福音書に 2 回出て来ます。一つは 12 章 27 節で「今わたしの心は騒いでいる」とイエス様が仰った時です。十字架の死がいよいよ目前まで迫って来たことを覚えて、イエス様はご自身の存在が根本から揺さぶられるような激しい心の動揺を感じられました。そしてもう 1 回は 13 章 21 節です。最後の晩餐の席上でユダの裏切りを予告する時です。ご自身が愛し、育てて来られた弟子の一人に裏切られる時、イエス様は心に深い激動を感じ、その心は騒いだのです。これらの時と同じ言葉がこのヨハネ 11 章でも用いられています。

一体イエス様は何に対して、霊の憤りを覚え、また心を騒がせたのでしょうか。色々な意見が注解書を見ると書いてありますが、最も妥当と思われるのは人間をこのような嘆きと悲しみに追いやっている死の現実に対してということでしょう。イエス様から見て、人間がこのように死の力の下に屈服させられ、声を上げて泣き悲しんでいる

状態はあまりに悲しいものです。人間はこのような運命に至るために造られたのではありません。神が造られた人間は、神との正しい関係、愛の関係の中で、神が与えてくださるいのちを喜び楽しみ、何よりもそのような祝福に生かしてくださる神ご自身を永遠に喜び、賛美する存在として造られました。しかし罪を犯した人間は今や、本来あるべき状態から大きく落ちています。マリアも彼女と一緒にいるユダヤ人も大きな声を上げて泣いています。その姿を見た時、イエス様は平静でいることはできず、霊に憤りを覚えたのです。人間をその力の下に閉じ込めている死に対し、またその背後にいるサタンに対してでしょう。

もう一つ今日の箇所でクローズアップされているイエス様の注目すべき姿は 35 節にあります。そこに「イエスは涙を流された」とあります。これは聖書の中で最も短い節だと言われます。英語では Jesus wept とたった二つの言葉。原文のギリシャ語では冠詞が入り、3つの言葉です。なのにイエス様について雄弁に語るみことばとなっています。この「涙を流された」という言葉は、33節でマリアたちが声を上げて泣き悲しんだ姿を表す言葉と違い、静かに涙をこぼされる様子を表した言葉です。ラザロをどこに置きましたかと尋ねて、「主よ、ご覧ください」と言われた時、死が人類に及ぼした荒廃を深く感じてイエス様の目からは涙がはらはらとこぼれ落ちたのです。ある人は、イエス様がここに来たのはラザロをよみがえらせるためであり、これからすることをイエス様はご存知なのだから、ここで泣くのはおかしいのではないかと問いますが、そうではありません。確かにイエス様はこの後、ラザロを生き返らせます。そのために来たのです。しかしイエス様は死を前にして改めてその現実の憤り、深く心を騒がせ、またそういうお方として静かに涙を流されたのです。

このイエス様のお姿から以下の4つのことを今朝、心に留めたいと思います。一つ目はイエス様は私たちが苦しみの中にある時、私たちとともに苦しみ、私たちの苦しみのただ中においてくださるということです。イエス様は苦しみに直面する私たちのところに来て、はい、それでは私が解決してあげましょう！と言って、何事もなく解決されるお方ではないということです。イエス様は私たちと同じ人間になってくださったお方として、私たちと同じレベルまで下り、私たちが感じるように感じ、私たちが思うように思い、それをご自分のことのようにして受け止めて心乱し、涙される方です。私たちのそばに立ち、私たちに深く理解し、心から同情してくださる方です。私たちはイエス様はそういうお方であることをここに見て、感謝してイエス様に近づい

て行って良いのです。ヘブル人への手紙 4 章 15～16 節：「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした。すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

二つ目にイエス様はただ私たちと一緒に涙してくださるばかりでなく、私たち以上の深い嘆きをもって涙してくださるということです。ここでマリアと、彼女を取り巻くユダヤ人は泣いていました。それは本当に悲しかったからです。しかしイエス様の涙は共感するというレベル以上のものです。マリアたちは死という結果の前に泣いているだけでしたが、イエス様はその表面のことだけでなく、なぜ人はこの悲しみの下にあるのか、その背後にある罪という大きな問題、そして人々を死の力の下に閉じ込めているサタンの存在を見ていたでしょう。その現実を見つめて深く心を騒がせ、涙まで流してくださったお方だから、イエス様は私たちを救うために十字架へと進んでくださったということだったのではないのでしょうか。そういう意味でこの涙はイエス様を十字架へ追いやったものです。私たちよりももっと深い涙を流してくださったお方としてイエス様は十字架へと進んでくださいました。しかしその道は決して簡単でなかったことが、先ほど触れた 12 章 27 節を考慮すると分かります。12 章 27 節にこうあります。「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」先に触れた通り、ここの「心は騒いでいる」という言葉は、今日の箇所 33 節の「心を騒がせて」という言葉と同じです。イエス様は私たちが置かれた悲惨な状況を見つめ、心を激しく揺さぶられて十字架への道を進んで下さるのですが、十字架がいよいよ目の前に迫った時、その死の重みを感じて、イエス様の心は再び騒いだのです。つまりイエス様はこの二つの間で板挟みになったということです。人間を思って、その心が激しく騒ぎ、私たちをそこから救い出そうと歩んでくださいましたが、今度は自分に降りかかる罪の罰、父の御怒りを思って、再び心が激しく騒いだ。しかしここに示されていることは、そういう板挟みの中で私たちのために流してくださった涙が勝った！ということです。イエス様はご自身に対する顧みを一切捨てて、「何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」と言われ、「父よ、御名の栄光を現してください」と祈り、さらに前へと進んで行かれたのです。

ヘブル人への手紙 5 章 7 節には私たちのためにさらに泣いてくださったことがこう書いてあります。「キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。」これは特に十字架前夜のゲッセマネの祈りを指している言葉と考えられます。あるいはゲッセマネの祈りを頂点とするイエス様の地上の生涯全般を指していると取ることもできます。イエス様はそこで大きな叫び声と涙を持って祈りと願いをささげられました。イエス様は本来は私たちが流すべき、いや私たちには決して流し切れない涙を代わりに流してくださいました。そしてついに十字架上で尊いご自身の命をささげてくださいました。

三つ目にイエス様は十字架の死から数えて三日目となるこの週の初めの日に復活されました。この復活により、イエス様は死の力を打ち破られました。今や I コリント 15 章 55 節にあるように、死に対して、「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」と力強く勝利の宣言をすることができます。そしてイエス様は今、天の父なる神の右の座で、ご自身が成し遂げたみわざに基づいて力強くとりなしてくださいています。ヘブル人への手紙 7 章 25 節：「したがってイエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことができになります。」

最後四つ目に、それでもなお今日、最後の日に至っていない私たちには地上で涙することがあります。愛する人との地上での別れを経験して涙することがありますし、また主の復活を心から感謝しつつも、なお日々の生活で悲しむことがあります。しかしついにすべての悲しみの涙と完全にさようならをする日が来ます。ヨハネの黙示録 21 章にはやがての新しい天と新しい地のことが記され、その 4 節にこうあります。「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」今まだ私たちに涙を流すことがあっても、やがての日にそれは全くありません。もちろん感動の涙を流すことはあるでしょう。しかしそこにもはや死はありません。また悲しみ、叫び声、苦しみもありません。イエス様は十字架と復活によって、悲しみの涙と完全にお別れする全き救いの将来を私たちのために勝ち取ってくださいましたのです。

このイースターの日、私たちはイエス様がくださった救いを心から喜び、お祝いしています。イエス様はここに死で終わらない世界、死を越えた永遠の命の世界をもたらしてくださいました。しかしそれは今日の箇所を見たように、イエス様が私たちのために涙を流してくださったことによるということです。私たち以上に深い涙を流して十字架へ進んでくださったからです。その大きな犠牲と戦いとにより、イエス様はご自身により頼むすべての者を死とその嘆きから解放してくださいました。この救いを今朝、私たちは心から祝い、感謝したいと思います。なお地上にあつて様々な悲しみを経験する私たちは、私たちのために涙を流してくださったあわれみ深い救い主のもとに絶えず行き、その方とお話しし、この方の十字架を通しての力強いとりなしをいただいて、この方が用意くださった救いの道を進む者でありたいと思います。そしてあらゆる涙が完全に拭われる日が来ることを喜び見つめて、主に私たちのすべての感謝と賛美をささげる歩みへ導かれて行きたいと思います。